Fate/Je suis inconnu

ピロシキィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／Ｊｅ　ｓｕｉｓ　ｉｎｃｏｎｎｕ

【Ｎコード】
Ｎ２２９６Ｚ

【作者名】
ピロシキィ

【あらすじ】
どっかの世界の英雄が転生して一般人（自称）として生活していたら、聖杯戦争に巻き込まれました。

プロローグ（前書き）

はじめまして。
お手柔らかにお願いします。

プロローグ

夢を見た――――

片田舎にある村で生まれ、
いつか世界を見て回ろうと夢想した幼年の頃

夢を見た――――

村の近くで拾った剣を只管、振り続けていた少年の頃

夢を見た――――

何もかもが光に満ち、自信に満ち溢れ
村を飛び出した少年と青年の間の頃

夢を見た――――

冒険者として駆け出し、己が道を信じ走り抜けた頃

夢を見た――――

一人、二人と、仲間が増え続け何時しか傭兵団として、
名を馳せていた青年の頃

夢を見た――――

数多の戦場を駆け、常勝不敗の褒美にと小国の姫を娶った頃

夢を見た――――

自分が王と成り、王国の栄華を齎した賢王と謳われた晩年の頃

英雄と呼ばれる者達の末路は非業の最期と言われるが、
余は如何であったろうか。
今は病床に臥せる我が身なれど充足感に包まれておる。
なれば余は英雄ではないのだろう。

長き道程は想い帰せば一条の光の如し。
我が生涯に意味を成せたか、或いは無価値か。
それは余が死んでから歴史家達が創ること。

多くのものを手にし、そして零れ落ちたが、
歩んだ道に後悔など何一つも無く……

余は…いや俺は…最高に愉しい人生であったと。

さぁ、我が物語はここら終りぞ。

「…誰ぞ、我が剣を持て」

もう握る力も残っておらんが、
最期は生涯の戦友と共に往こう。

銘も無き王の剣　よ。

何処かの世界、何処かの国の王がその波瀾に満ちた生涯を終えた。

バイト行かねば

薄手のカーテンより朝日が差込み、ぼやける視界の元、
徐々に意識が覚醒していく。

「……」

ここ最近、何故か頻繁に妙な夢を見る。
‘妙な夢’というと語弊があるな、あれは記憶だ。
魂に刻まれた前世の記憶。
輪廻転生、三界流転、流転輪廻，転生輪廻
読み方と多少の意味は違えど、人は生と死を繰り返し続ける。
生まれは死に、死には生まれ、その輪を回り続けるという事らしい。

つまり俺が何を云いたいかというと、
俺にはその『前世の記憶』があると。

我が生涯に一片の悔い無し　の大往生を遂げた思ったら、
薄ら明るい光だけを感じふわふわとずっと微睡みの中にいる感覚が
今、考えれば一年ほどあったのだろうと思う。
当時は時間の感覚など無かったから、その頃はまだよかった……。

それから徐々に徐々にと自我と感覚が出来てきて、いや目覚めてきて、
あれ、俺もしかして赤ん坊になってる？
気付いてしまってからは大いに狼狽えた。
いきなり赤ん坊。いやほんと参った。
口も満足に動かす事も出来ず、言いたいことも言えず泣き喚く。

排泄行為も儘ならない。前世の死ぬ前より酷い。
まさに羞恥。此れほどの屈辱を未だ嘗て味わっただろうか！？
否、前世の生まれた頃も同じようであったろうがその頃の記憶は無いので断じて否である。

暗黒歴史トシテ我ガ記憶ノ奥底ニ封印ス。

兎に角、『前世の記憶』がある状態で再スタートした訳だが幼少の頃は体が弱かった。
これは俺の推論だが、まだ出来立てホヤホヤの小さな器に九十余年の人生の記憶が、
入れば耐えられないだろ。
お猪口にバケツ一杯の水は入りませんよ。という事だ。
俺には自覚が無いというよりは「何かダリィな」位に感じてただけだが、
生死の境を何度か彷徨っていたらしい。うん良く生きられたな。
お袋さんが「アンタは小さい頃、散々心配かけたんだから、もう今後は心配してやんない」
と中学校に入った頃仰いました。
そして一人息子置いて単身赴任中の我が父上様と遠い地で暮らしている。

……なんて親だ。

まぁ無事ここまで育ててくれたんだ何も言うまい。
俺も俺で子供らしくない子供だっただろうから。
よく言えばとても賢い子供、悪く言えば老成していたといえる。
あまり手をかけることは無かった筈だ。
しかし、『前世の記憶』というのは生きていく、成長する過程で弊害になることが多い。

言葉はまぁ生まれた頃から何年も聞いてりゃ覚えられる、
若干他の子供と比べると喋れるようになるのが遅かったらしいが。
文字は大変だったな。頑張って勉強しましたよ。義務教育有難う。
というか教育水準の高さに驚きだ。
習慣や風習、文化に文明や伝統的行事に歴史は新鮮の一言だが、
前世の概念があるからかなり戸惑いを覚えた。
そして、この世界の歴史を見たとき驚愕した。
世界は違えど人は争うものだ、戦争はあるだろうと思っていた。
しかも何度も繰り返すのものだとも分かっていたが、
しかしこの数は異常だ。そもそも世界の人口からして違うが
ここまで戦死者が出るものなのか、それでも未だに世界のどこかで
戦争をしているのだ。人とは業の深い生き物だと改めて感じた。
今の一学生である身分の俺が考えても詮無き事だが、
文明というかこの世界の科学というものは非常に恐ろしい。
効率的に大量に人を殺せる兵器とか最もたる物。

兵器じゃなくて生活に密着する科学は超便利だし、
いやもうテレビやゲーム電気製品全般、俺も今じゃ無くちゃ生活で
きないが、
自堕落してしまうなんて恐ろしいのだ科学とは。出来れば部屋に引
き篭って一日中、
快適な温度に設定された部屋で歴史小説や漫画を読み、
ネットにゲームをして過していたい。
進路希望の紙に「自宅警備員」又は「ニート界の神」と書きたい。
きっと担任葛木あたりに説教食らうだろうが。
いやアイツは何考えてるか分からないから「そうか」の一言でも終
わりそうな気もする。

……うん。試してみよう。

ただ葛木がどんな反応を示すのか見たいだけ。
自堕落な生活が送れるほどのマネーも無いし、
両親に迷惑をかけるわけにもいかない。
そしてこの世界も見て回りたいという夢がある。
一日あれば地球の裏側までいけるんだ。
前世より時間的には世界は狭い。いろんな国を見て回ろう。
ほんとにそう考えると、この世界は発達し繁栄してるといえるのだろう。

魔法から科学に成り代ったのか、それとも元から魔法という概念など無かったのか。
しかし歴史を見れば魔女狩りや異端審問などあとは古い文献に妖術や仙術に忍法など
名前が違えどそれっぽいものがちょくちょく出てくるのだ。
それを題材にした漫画や物語もなかなか面白いし、興味深いところもある。
現に前世ほどではないにしろ魔素は存在している。
俺は前者のほうが有り得そうだと思う。

もっともこの様な事を言えば「厨二病はもう卒業しろ」などと言われるだろう。
だが、しかし俺の前世は剣と魔法がガチな世界であったのだ。
所謂ファンタジーな世界。ドラ〇エやエフエ〇のような世界であり、
人間以外にエルフやドワーフ、獣人　多種族のこっちで言う知的生命体がいたわけだ。
他にも竜や魔王に精霊なんかも居た。
それがこちらでは御伽話で存在すると言うのは偶然なのか。
もしかしたら俺と同じような存在が何処かに居るのかもしれない。
居ても居なくても世界を見て回り……。
あれ、なんか思考が完全に深みに嵌っているぞ。

何ゆえここまで深みに嵌った？

……そうそう最近やたらと前世の夢を見るってのが切欠か。

それに最近やたらと身体能力が上がってきている。

成長期ってレベルじゃないですよ最早、人外です。

もともと魔素を体内に取り込み魔法をぶっ放す事も出来たし、

取り込んだ魔素で一時的な肉体強化（ブースト）できたから最初から人外だったかも…。

いやいや、それにしたってここ最近の成長は尋常じゃない。

１００ｍを本気で走れば金メダル確実位だったのが

今じゃ８秒切るし、ブーストつかった日にゃ２秒とか有り得へん。

やった時は思わず乾いた笑いが出たぜ。

もちろん人が居るときは常識の範囲内で運動神経がいいくらいの力しか出してない。

この急成長は夢と関係がありそうなんだが、生憎と相談できる相手が居ないのが現実だ。

「なぁ俺さ最近前世の夢頻繁に見るんだけど、何でだと思う？」

……無理だろ。

心配されるか、苦笑いで済むか、それとも軽蔑された目で見られるか。

都市伝説の黄色い救急車呼ばれるかもしれん。

……どうにも成らないわ、切り替えよう。

おっと変な思考の海に沈んでいたら結構いい時間じゃないか。

そろそろ起きるか。

う〜寒っ。
雪が積もることが無い地域とはいえ冬はやはり寒い。
でもバイトに向かわねば。
仕方ない布団から抜け出すとしよう。
学園は遅刻してもバイトは遅刻しないこれ俺の信条。
ヨッ！勤労学生の鏡っ！
と鏡の前で身嗜みを整えながら馬鹿なことを考えるのであった。

棚卸しをしよう

鉛色の雲が空一面に広がり、吐く息も白く　冬真っ只中。
正月気分も抜け、学生である自分も明日から学園に通わなくては行けない時期だ。
新都で働くスーツ姿の方々を横目で眺め、そんなことを考えながら一路、
愛車に跨りバイト先へと向かう。
追伸、真冬のバイクはめっちゃ寒い。

バイト先であるコペンハーゲン。レンガ調の建物はお洒落だ。
一言で言えば　酒屋兼居酒屋　であるが、まぁ色々とアレな人間が居る場所でもある。

「ちゃーっす。」

店内に侵入し適当な挨拶しながら酒屋のエプロン装着して準備完了。
さてと、世界をめぐる資金を得るために本日も肉体労働に精を出しますか。

「ああ、おはようナッシー。」

この妙な呼び名は俺にあてたものである。
何度言っても直さないので、もう諦めてはいるが、
何とかならんのだろうか。

「どもネコさん。今日は棚卸しでいいんですよね？」

この店の一人娘の猫っぽい女性。
音子（オトコ）という本名を何故か嫌ってネコ呼ばせてる。
穂群原学園に通っていたが、酒がらみで問題起こして自主退学したらしい。
英語教師の藤村と同級生だと言っていた気がする。

「そそ、年末年始と結構売れたからねぇ。頼りにしているよ。」

亜麻色の髪を揺らしながら人懐っこい笑顔を向けられ、
思わず頬擦りしたくなるが、耐えましょう。
忘年会シーズン、これからは新年会シーズン書き入れ時である事は確かだ。
まぁ頑張りますよ。

「アイサー。ほんじゃあ倉庫に篭ってますから何かあれば言って下さい。」

「うん。エミヤんはもう倉庫に居るから～」

「ういー」

ネコさんに後ろ手に振って倉庫へと向かう。
そこには橙色の髪の少年がいる。今の俺も同じく少年か。
彼とは中学からの仲となる。

「よう衛宮。男子生徒の敵！　もげろ！」

「なんでさ！？」

リア充と俺よりイケメソは滅んでしまえばいいと思う。
コイツは自宅に後輩の可愛い女の子を毎朝毎晩呼んでアハンウフンの関係を一年くらい続けている。
アハンウフンは俺の妄想だが、一つ屋根の下でナニがあってもおかしくないと思う。
偶に登校の時とか二人で居るとこ見たりするし。
アレ？　それって……前日泊って朝二人で登校か？
ウレシ、ハズカシ、アサガエリならぬアサトウコウですか！
ソレなんてエロゲ？　羨ましすぐる……。
よし、また今度夜飯をたかりにいくという口実の元、邪魔しに行こう。

「……衛宮はシネばいいと思う」

おっとつい口から本音が……。

「だから、なんでさ！？」

「お前などもう知らん！　あっちの棚は俺がやるから在庫表よこせ！
あと、近々お前の家に晩飯をご馳走になりに行く！」

「はぁ？」

きょとんとしている衛宮少年の持っている紙を何枚か引ったくりズカズカ奥へと歩みを進める。
ちょっと大人気ないな俺も。
新しい生を受けて精神が肉体に引っ張られているのか？
こちらの生活になれて影響を受けているのか、
前世では女の一人や二人でどうということ無かったが、

俺が今チェリーb…もといボーヤだから、か。
何にしろ曾孫にあたるような年齢の少年にする態度ではなかったな反省。
これも『前世の記憶』の弊害だな。

只、衛宮は少々イジリ甲斐があるからな。やめられない。
というよりは放置できない存在だ。

コイツの目指してるものはきっと‘完璧超人エミヤー’なのだろう。
基本、ノー　と言えない日本人では無く求められれば快く受ける。
または困っている者は見過ごせません。を地でいくのだ。
そこに見返りなどを求めていない。

その精神はとても綺麗で素晴らしい。だが、それ故に危うい。
衛宮の場合はもう病的というより　呪い　に近い。
今のまま、それを続けていく果てに或るのはおそらく……破滅だ。

人とは業深き存在である。
小さな救済と言うのは道端に落ちた小銭であり、
人によっては最初こそソレをどうしようか悩むかも知れないが、
毎回道端で小銭を見つければ「おっラッキー」と拾い懐へ。
俺なら悩むことなく最初から懐へ入れる。
数日すれば拾ったことすら忘れるかもしれない。
衛宮からの救済が当たり前になり断られる事は無いと麻痺し、慣れる。

良心的な人間ならば　頼る　ではなく　依存　で済むだろう。
これが恋人や妻であればお互い不幸になるだろうが、まだいい。

では、良心的ではない人間の場合なら、

便利な道具もしくは都合のいい奴隷となる。

そう　奴隷　である。

彼がそうなった時、人の業深さを見せ付けられ破滅するだろう。
彼はきっとそうなってしまうに違いないという確信がある。
だから放って置けないのだ。
自分の前世の少年時代に似ているが酷く歪んでいる。
真っ直ぐだが、薄っぺらい　そんな存在を。

「このリキュールが少ないな、これは店に並べて在庫発注せねば」

衛宮のことを考えながらもちゃんと棚卸している俺って凄くない？
と自画自賛しつつ、一段落ついたので衛宮に目を向ける。
帳簿的なものにチェックを入れ、店に補充するものは酒の入ったケースを移動させている。
あれ重いんだよね。頑張れ少年。腰を痛めて今夜はお預けになっちまうくらいに。

「なぁ、月見里（ヤマナシ）」

月見里（ヤマナシ）というのは俺の名前で苗字の方である。

「なんだ衛宮？」

「今凄く鋭い視線を感じた気がするんだけど…。」

ほほぅ俺のプレッシャーを感じ取ったと言うのかなかなかやる。

「よく気付いたな！　お前の腰がバッキリ逝ってしまえと願っていた。」

グッと親指を突き立ててていい笑顔を作る。

「物騒なこと願うなよ！」

「さて、もう少し頑張るか。」

衛宮を無視して仕事に戻るとしよう。

「うおい！」

後ろで喚いているような声がしているような気もするが、
アーーアーー聞こえないったら聞こえなーい。
それからちゃんと棚卸しました。

「エミやん、ナッシーお疲れ～。はいコレ」

ネコさんが缶コーヒー2本持って倉庫に来た。

「お疲れ様ですネコさん。ありがとう。」

「うぇーっす」

缶コーヒーの差し入れ受け取り早速飲む俺。
なんだ士郎君は若干お疲れのようじゃないか、ケッ腰の運動ばかり

しているからそうなるんだ。

「もしかして全部終わったの？」

はて？　なんかネコさんの分かり難い表情が、余計分かり難くなっているが、
どうしてだろうか？

「「？」」

え？　なんで？　終らすといけないの？

「あのねエミやん。私も言わなかったのは悪かったけど今日全部終らせろなんて
言ってないでしょう？　君はすぐ頑張りすぎるんだから無理しちゃだめよ」

驚愕の新事実！！

「で、でも、月見里（ヤマナシ）も一緒だったから俺一人頑張った訳じゃ…」

「ナッシーは人で在って人に在らず　なんだから彼に合わせちゃだめ」

あれれ？　俺頑張ったのになんか褒められてないよ？
視界が霞むのはどうしてだろうか？今日の缶コーヒーはほろ苦しょっぱいな……。

漢、月見里航（ヤマナシワタル）　涙は流さねぇ！

棚卸しをしよう（後書き）

主人公の名前発覚

昼食にしませんか（前書き）

プロローグ２日目くらい？

昼食にしませんか

冬休みが終わり学園生活が始まり、真冬の寒さが身に染みる今日、この頃。

山と海に囲まれた静かな地方都市は本日は良い天気である。

やはり太陽が出ると気温が暖かく感じられる。

家を出て穂群原学園まで通学路をしばらく歩いていると同じ制服を着た連中が、
ちらちら目に付くようになる。

そして登校する生徒の中に見知った姿を見つけ、声をかける。
今日は例の後輩が一緒だ。おのれ、リア充め。

「よう大将。昨日はお盛んだったのか？　モゲてしまえ！」

「おはよう月見里。お前はそればっかりだな。」

しかめっ面しながら挨拶を交わす衛宮。

「おはようございます月見里先輩。」

衛宮とは対照的な柔らかな表情の巨乳美少女。
頬がほんのり赤いのは俺の言葉で昨日の情事を思い出したからだろうか？
だが、その初々しさ、それがいい。相変わらず可愛いな。
衛宮の友人として一応、挨拶くらいはしてくれる関係だ。

「おはよう、桜嬢。」

間桐桜（まとう さくら）

1年ほど前から毎日衛宮の家に入り浸っている後輩の巨乳美少女だ。
大事なことだから2回言ったぞ。大は小を兼ねるだ、うん。
衛宮いわく、妹のような存在　とのこと。だが、

「鈍感主人公はみんなそう言うんだ。それでいてあとで美味しく頂いちゃうんだ。」

俺は断じて信じていない。
この子の反応見りゃ分かり易い位に行為…じゃなくて好意を衛宮に向けているじゃないか。
気付いてないとは言わせない。気付くと言えば、この子……いや考えすぎか。

「何言ってるんだ？」

「そうだな。俺も大人になって一友人として祝福してやらねばな。」

前も言ったがいつまでも嫉妬していても仕方が無い。

「おい！　月見里。　さっきから何を…「心配するな衛宮。
あの義兄（ワカメ）の説得なら俺がしてやる！　主に肉体言語に限るがな」

そう桜嬢には兄がいる。コイツがもう女にモテる。ワカメなのに！
性格はワカメだからネチョネチョしていて、

…偶に本気で乾燥ワカメにしてやろうかと思う。
でも衛宮はこれから義兄となる奴になかなか色々言えまい。
だから俺が友人として衛宮に代わって話し合いをしてやろうじゃないか！
しばらくは女子に白い目で、見られようが俺は気にしない！
そうと決まればワカメを探しにＧＯＧＯＧＯ！！
校舎に向かって走り出した。

「行っちゃいましたね先輩」

「そうだな桜。」

「ワカメって何のことでしょうか？」

「…さぁな。アイツの考えてる事は俺には一生分からないと思う。
……俺達も行こう」

穂群原学園は今日も平和である。

―昼前の授業は空腹との戦いである

ｂｙ　ヤ・マナシワ・タ・ル　伊　１７８９～１８７７

先生、お腹が、お腹が空きました。

ワカメ探して走り回ったのがいけなかった。
あと後ろから不意打ちのボー・アンド・アロー・バックブリーカーで体力使った。
超成長してるの忘れてて危うくワカメが帰らぬ人となるところだったが、まぁ満足した。
きっと今日一日くらい保健室だな。

ぐぅっと腹の虫が鳴り、空腹に身悶える。

授業中に学食へ行ける筈も無く、

いや一度やったが英語教師の藤村タイガーに捕まり、職員室へ連行

された。
そこで言い負かせて、脱出を試みたら場所が悪かった。

職員室である。

周りは教師ばかりで援軍は居なかった。
周りの教師に超睨まれた。気配を消しても脱出不可能だっただろうな。
藤村タイガーは涙を浮かべて教頭に泣き付くし教頭は教頭で
生徒に言い負かされるとは何事かと藤村タイガー叱咤してカオス空間が誕生した。
その後、何故か校長に藤村タイガーと俺が怒られると言う展開で幕を閉じたが。

いい思い出と言うことにしておこう。

「Ｃｏｕｌｄ　ｙｏｕ　ｒｅｃｏｍｍｅｄ　ａ　ｎｉｃｅ　ｒｅｓｔａｕｒａｎｔ　ｎｅａｒ　ｈｅｒｅ？
ハイ！！　ここ月見里（ヤマナシ）君。さぁ立って日本語訳してみよう！
先生さっきからボーっとしているの知ってるんだからね！」

いきなり俺を指名する藤村タイガー。何故か偉そうにえっへんと胸を逸らす藤村タイガー。
あんた歳いくつだよ？　俺は前世入れると１００超えてるがな。
そんな態度だから親しみ易いもとい舐められるのだ。

……主に俺から。

「ココらでうまい飯屋はござらんか　になります。
ポイントは学習などではないのでｔｅａｃｈじゃなくてｒｅｃｏｍｍｅｄを使うとこと
ｄｅｌｉｃｉｏｕｓじゃなくてｎｉｃｅを使うとこがナイスですね」

訳は多少雑だが許容範囲だろ。
あ、俺トップとは言わないが成績いいほうなのだ。

「うぅ……」

「座っても？」

フッ、勝った。またつまらぬ虎を泣かせてしまった。
藤村タイガー若干涙目だぜ。

「むぐぐぐっ……」

タイガーが悔しそうに唸っているが無視だ。
腹減ったなぁ～。何かで気を逸らせぬものだろうか。
机に突っ伏しながら考える。

……。

……。

……窓の外を眺めていると隣の席の三枝と目が合う。
三枝の席は窓際であり、窓の外を見るには自然と三枝の方を見なきゃならないのだが。

「……っ」

あ、目逸らされた。この照れ屋さんめ。
三枝由紀香（さえぐさゆきか）華奢な女の子。
可愛らしい顔立ちというか笑顔がなんか癒されるんだよな。
性格はおおらかで、物静か。
地味が悪いとはいわないがクラスで取り分け目立つ存在ではない。
…そう思っていた。席替えで隣になるまでこんな子居たか？　と感じたくらいだ。

…ゴメンな三枝。

でも、よくよく観察してみれば、必要最低限を除いて、
どうやら女子の中でそれとなく三枝を男と接触させないでいる。
人生経験でいけば、百を超えていると言うのに女子（おなご）の考えは全く分からん。
いつも同じ部活の3人で行動しているのを見かける。
そういえば、偶に三枝は遠坂凛に何か話しかけて凹んでるよな？

遠坂凛（とおさかりん）

穂群原学園に通う生徒なら誰しもその名前を知っている。

容姿端麗・才色兼備・高嶺の花・優雅なお嬢様・学園のアイドル・胸は将来に期待ｅｔｃ…など、

美辞麗句を並び立ててればまだまだ出てくるだろう。

それほどの有名人。

男女問わず人気がある優等生。確かに美少女だが、根からの悪人じゃないだろうが、

なんか腹黒そうな気がするし一度ボコボコにされたし、俺は近寄りがたいのだ。

というより彼女、魔法使いだろうし。

通常、魔法使いとは３０歳まで純潔を守ってこそなれる崇高な職業だが、

女性の場合は魔法処…ゲフン、魔法少女になるのだろうか？

……話が逸れた。

一先ず、都市伝説は置いておくとして。

何故、遠坂凛が魔法使いだと思うのか。

この世界の人間と言うのは基本、魔力というものを認識していない。

稀に無意識に魔力をコントロールしている者もいるが、そういう連中って大抵、

有名なスポーツ選手や格闘家だったりする。

長年の鍛錬において肉体強化の魔法を自然に身に着けている。

もちろんちゃんとした物ではないから魔法と言い難い代物だが。

衛宮は、この類に思える。

で、一般人は魔力があっても何も起きない。
だが、それでもソレは在ってそれぞれの形があるのだ。

遠坂凛の場合、あきらかに異質。

魔法使いは万物の気配を知る。

『前世』で俺に魔法を教えてくれた人の言葉だ。

この場合の気配とは色や匂いや数字、の事を指す。

感じ方はそれぞれ違うらしいが俺の場合、　匂い　だ。

多かれ少なかれ人は魔力と言うものがある。

それを俺は匂いで感じ取る。

遠坂凛は無味無臭。

意図的に隠蔽しているとしか思えない。

一度、隠蔽しているのか、すっげぇ魔力量が少ないから感じないのか
分からなくて、告白かましてドサクサで抱きついた事がある。

……あの時の俺は若かった。

そしてボコボコにされた。

……あれはきっと中国拳法。

だがしかし、素直にやられる俺ではない。
意識が途絶える瞬間俺は見た！

……白だった

そんな訳で遠坂は意図的に隠蔽している事が判明したわけだ。
だが、奴には聞けない。
何故なら身の危険を感じるから、

「俺も魔法使えるんだ、あと前世の違う世界の記憶もあるんだぜ！」

「そう、じゃあ解剖させて？」

ほら、人体実験されそうで怖いじゃない。
アイツから見ると俺は魔法が使える才能がある奴。
その程度の認識でいてもらいたい。

ほんと怖いから……。

「そ、そんなに…見つめないで下さい」

空腹から意識を逸らさせる為に思考の海にダイブしていたら、
三枝が恥かしそうにか細い声で囁いた。
癒されるわぁ～。
こういう子お嫁さんにしたいタイプだよな。

「や、月見里くん」

「三枝はかわいいなー」

机に顔を載せたまま呟く。
というかずっとこの体勢だったんだな。
首が痛くなってきた。そろそろ空腹が限界です。

「…っ！！」

あらま、ほんま初心な子じゃ。
あまり弄るのも可哀相なのでこれくらいにしておいて

「じゃあ今日はここまで、日直さん号令」

やったチャイムなった！！

「起立　礼」

藤村タイガーが出て行くときに俺に向かって「おぼえてろよー！」と言って
出て行ったが気にすることじゃない。それより飯だ。

「なぁ月見里」

「何か用か？　美綴。俺はこれからバーベキューなんだが。」

「ああ、学食かいそりゃ悪いね。でもちょっと待ちな」

美綴綾子（みつづり あやこ）クラスメイトで弓道部主将。
サバサバした性格の美少女で、薙刀を初めとして数々の武道の達人らしい。
美人は武道をしていなければならない、と言っていたがどうなのその信条。

「間桐のことなら、反省もしていないが後悔もしていない」
「間桐？　あんた慎二の奴に何かしたのかい？」
え、ワカメのことじゃないのかよ。
ワカメも弓道部だし。
「心配するな覆面は被ったし、後ろから殺ったから面は割れてないハズ」
「答えになってないじゃないか、ていうかいつも物騒なんだよアンタは」
はぁっとこめかみ押さえて溜息つく美綴。
「じゃあ、そういうことだから」
早く学食に行かねば空腹で倒れてしまう。
「私の用件が済んでないよ、まったく。」
「じゃあ早くしてくれ　ｈｕｒｒｙ！　ｈｕｒｒｙ！
あ、ちなみに弓道部のお誘いならノーサンキューです」
「衛宮といいアンタといいどうして、そう才能あるのに……」
弓道部のお誘いというのは、これは1年の時に体験入部の際、
衛宮は会心出しまくって、俺は矢を三本番えて的に当ててたからだ。
衛宮はその後入部したが怪我して辞めたんだっけ。

俺はワールドワイドの漢になるための資金集め、部活よりバイトを選んだから。
美綴は衛宮を部に戻そうと、俺を入部させようと未だ画策しているわけだ。

「じゃあ今度こそ、そういうことで！」

話は終わった。財布の中身を確認。ＯＫいける！

「だから待ちな。私の用件はそのことじゃないよっ！」

「おのれ美綴！　兵糧攻めかっ！　この鬼畜っ！」

「落ち着け月見里！　すぐ終わるから聞け！」

「嫌だっ！　何を食っても肉の味がする楽園に俺は行くのだ！！」

「あ、あの、よ、良かったら、お弁当多く作ってきちゃったので食べ…ますか？」

な、ん…だと？！

今まで空気と化していた三枝が驚愕の一言。

全俺が泣いた。

※この後、弁当は航が美味しくいただきました。

結局のところ美綴の用件とは
遠坂が今日休みだからアンタ何か知らないかと言うことらしい。

知る訳ないじゃん！　っていうか居ない事自体、今知ったわ！
何で俺にそんなこと聞くんだか……。

それよりも三枝が多く作った弁当はもともと遠坂に一緒に食べようと作ってきたものであった、複雑な気分だ。

フラグが立ったと思ったのにチクショー！

昼食にしませんか（後書き）

主人公は魔術と魔法の違いがわかってません。
魔力を使うものが全部魔法と言う解釈。

召喚してみる（前書き）

士郎君はランサーと追いかけっこ中

召喚してみる

今日も今日とて学校ですたい。

何でバイク通学禁止やねん。

だから歩いて登校です。

何時もより早く家を出てしまった為か、まだ通学している生徒は疎らだ。

三枝の弁当旨かったな……。

昨日、ほんのり甘い昼食タイムだったのを思い出す。

今日もそれを味わえると思うほど夢見る少年じゃない。

あわよくば、……いや、やめよう。現実はいつも残酷だ。

……いいじゃないか俺、学食嫌いじゃないし。

穂群原学園の学食。

大雑把な味付け故に女子には受けが良くない。

というより、「なに食べても肉の味しかしねえ」とは誰の言葉だったか……。
まさしくその通りなのだが、俺は好きだ。たまに胸やけするけど。

――パチッ

「ぐっ、痛っ」

校門を抜ける時に静電気というには温い、体中に電気が走る感覚を覚える。
思わず立ち眩みに似た症状が出てふらつく。
うっ、手を膝に付き深呼吸する。

おいおい…、本気かよ…。

昨日までは感じなかった圧倒的な違和感。
まるで凶悪な魔物が大きな口を開けて待っているような、不快感が襲ってくる。
結界。まだ発動していないが発動させちゃならねぇ類の。
こんな物騒なものを仕掛けた人物は一体何を考えている。
いや、そもそもこの大結界と読んでもいい代物を一人が作ったのだろうか？
しかも一日で。
……遠坂か？
確かに今の頭の中の情報だと一番、黒　だ。
アイツ以外魔法使える奴知らない。
しかし理由は？
愚民どもよ我が前に跪け　的な……。
昨日、新都のビルの屋上で下界を見下していたし。
学園休んでまでする様な事だろうか。

それが準備の為なら？

無理だ。数時間で作れるような物じゃねぇ。
何人かで何週間かかるような代物。
新都のビルに行く意味も無い。
本気であるなら朝一から学園で作業に勤しむ。

いや、待てよ、それはあくまで俺の『前世の常識』ではないのか？

こちらの世界の魔法師はこれくらい当たり前にやってのけるということか…。
それだと俺はもう、お手上げだな。
しかし前世ほどでは無いが、それなりに体も鍛えてるし、
魔法も簡単なものなら扱えるし、多少の耐性も備えている。
やり方によっては、或いは…。

だが、これほどの結界を数時間程度で作り上げることの出来る人物と勝負して勝算は？

一体どれほどの威力の魔法を放ってくるのか、背筋に嫌な汗が流れる。

ならばこの件は放置し、安全なところに避難するか？

巫山戯んなっ！　こんな大規模撲滅イカレ結界放置なんぞ出来るか！
誰だか知らないが上等っ！　売られた喧嘩は買ってやるぜ！

うしっ、そうと決まれば授業サボって結界に嫌がらせしてくれようぞ。
あと、遠坂の様子も探らねばならんし…、

しまった！

もし犯人が遠坂の場合、結界が出来たその日から教室に居ないじゃ、
気付かれたと警戒され、かなり怪しまれる。

その逆もだ、遠坂が犯人じゃない場合でも、

この結界の存在に気付く↓　誰がやった？　↓　今日、朝から俺が居ない。
↓　アイツ魔法の才能がある。↓　怪しい

作戦変更。一時限目は出席して遠坂の様子見。
それによって取る行動を考えよう。

「むっ、どうした月見里？」

「…柳洞か。急に立眩みがな。どうやら体調が悪いようだ。」

「鬼の霍乱とは、よもや珍しいこともあるものだ」

柳洞一成（りゅうどういっせい）

我が学園の生徒会長。柳洞寺の坊主の倅。
真面目でいい奴なのだが奈何せん真面目すぎである。
将来ハゲそう。あっ、どうせ坊主になるから関係ないか。

「酷い言われ様だ。心配しやが…れ…？」

「どうした？」

「すまんが肩を貸してくれ」

「む、大丈夫か？　このまま保健室に行くか」

柳洞の肩を借りながら歩き始める。

「…いや、教室でいい。座って休めば落ち着くだろう」

「そうか、だが無理はするな？」

やはりな。柳洞に魔力的な干渉が見られるおそらく暗示の類。
こちらも干渉させてもらおう。発動条件は分からんが、
行為の上書きなら…よし、いける！

「……ああ。そうだな。ところで最近何か変わった事とかなかったか？」

なるほど、発動すると相手を殺めると。こらまた陰湿な暗示だ。

「いや、取り分け無い。ああ、親父殿が偶には禅を組みに来いとは言っておった。」

「はは、そうか。宜しく言っといてくれ。」

他愛の無い会話を続けつつ上書きするって結構疲れる。
しかし、誰がこんなものを？　随分とタイミングがいい。
結界のほうと同一人物、少なくとも何らかの関わりはあるよなぁ。

「うむ」

よし、上書きうまくいった。発動すると……くくく…。
発動しないことを祈ろう柳洞の為にも。

昼休み

一時限目、案の定に遠坂は俺を疑いの目で見ていたが、
朝、柳洞の肩を借りて来た事や、体調が悪そうに装っていたから、
結界のせいで体調悪くなったと思ってくれたらしく、
とりあえずの警戒を解いたっぽい。
俺もなかなかの演技力だったし、本気で心配してくれた三枝にちょっと萌えたのは内緒。
これでも小国の王をしていた身ぞ。腹芸一つや二つどうと言う事無

いわ。

というわけで、次の授業から保健室に行くと言うことにして、学園内を探索。
結界の基点を何箇所か見つけてちょいちょいと嫌がらせの上書を施し、
最後、屋上に見つけたこの基点に俺の執念を込めた盛大な嫌がらせを書き終えたところだ。
真冬の屋上になんか人が来ないから結構派手に出来ましたよ。

ふっ。いい汗かいたぜ。疲労感がッパネェ。
まぁ、出来る限りはやったが消すことは俺の腕じゃやっぱり無理だったが、
しかし、しばらくは発動できまい。

その間に出来ること考えねばな、帰って使い魔でも召喚してみるか。
文字通り猫の手も借りたいくらいだしな。俺一人じゃ監視も儘ならん。

でも今は疲れたから、保健室で寝よ。

そして夕方、自宅。

保健医に叩き起こされ自宅へ帰還してきた。
なんでも6時までに完全下校になったらしい。
最近物騒だからだってさ。

…知ってる、あんな結界あるしな。

というわけで、人手が足りないので使い魔を召喚したいと思います。
召喚した使い魔を放って情報収集に勤しみ現状把握というわけだ。

その為に帰り道、文具屋で大きな紙を購入してきた。

Q　何に使うかって？

A　魔法陣を描く為です。

我が家は築7年　木造2階建て　普通の家です。
床や畳、壁に描ける訳無い。
描いたら父上と母上に追い出されるかもしれないじゃないか。
父上様に限っては息巻いて家建てたのに転勤で1年と我が家で暮らしていない。
ちょっと残念な人なんだ。
だから、なるべく綺麗に保っておかないと可哀相じゃん。

さてじゃあ、やるか。

使い魔の召喚　3分クッキング風

用意するもの

・大きい紙　一枚

・自分の血　適量

・水性絵具（紫）

・魔力　　適量

場所は自分の精神が一番落ち着けるところがいいでしょう。

今回は自分の部屋です。

・先ず初めに水性絵具と自分の血を溶いていきます。

絵具の色に関してはお好きな色でどうぞ。

今回の色は量が大変余っていたので使用したまでです。

・次に溶いたものを使用して白い紙に魔方陣を描いていきます。

この時のポイントは魔力を流しながら行ってくださいね。
多すぎても少なすぎても紙が破れてしまいますから気をつけましょう。

・完成した魔法陣をしばらく放置して自然に乾かします。

ドライヤーなどを使用して乾かそうとするとドライヤーの風で、
滲んだり、崩れたりしますのでお勧めできません。

・乾いた魔法陣の真ん中に手を置いて再び魔力を流し込みます。

ここでも今回使用した紙はデリケートなので、
あまり魔力を流し込み過ぎないようにしましょう。

・最後に呪文です。

「…我が呼びかけに応じ来るモノは我が血肉を代価として与えん」

今回の詠唱呪文に　血肉を代価　とありましたが、実際に血や体の一部
を与えなくても大丈夫なので安心しましょう。
今回の召喚はあくまで小動物的なものを想定しているためです。
※悪魔や精霊の場合は文字通り、ご自身の血肉または魂など必要な場合があります。

「来たれ我が手足となる下僕よ！」

・魔法陣が強い光を発して何か手応えがあれば成功です。

今回の『使い魔の召喚』は魔法入門2月号にも掲載されてます。
それでは、また。

閃光と紫電が魔法陣から発せられ徐々に収まりを見せていく。

「……なんでさ！」

おっと思わず衛宮の口調が移ってしまった。

落ち着け、これは果たして成功したと言えるのか？

生物じゃなくて無機物だと！？　しかしこの慣れ親しんだ重みと手触り。

本当に懐かしい。

まさしくそれは　剣　だった。

暫く混乱と懐かしさが混じりあった思考が落ち着き、冷静になってきた。

全然意味が分からん。

自由に出現させたり、消したり出来るのは便利だがどうしろと？

ふぅ腹減ったな、衛宮の家に晩飯たかりいこう。

深く考えるのを放棄した。

召喚してみる（後書き）

スットクはもうない

青いタイツの男（前書き）

せいばぁさんはけいわいだとおもう　ｂｙわたる

青いタイツの男

皆さん、こんばんわ。

衛宮さん宅へ晩御飯を頂戴しに参ったわけですが、
家主が　ガシャンという盛大な音共に窓を突き破って出てきました。
また、その窓から青いタイツの男性が赤い棒もって出てきて、衛宮君を
蹴り飛ばしました。

こういう場合はどう反応するのが正解でしょうか？

って馬鹿ぁぁーーー！！　落ち着いてる場合かっ！！

止めろ止めろ！！

アイツはヤバイ。ヤバ過ぎる。

動きもそうだが殺気が人間のそれと次元が違う。

衛宮を助けろ！　と自分に喝を入れる。

トクンっと一瞬脈打つ鼓動を感じ、一気に衛宮へと駆ける。

「やめろぉぉぉぉ！！」

だが、僅かに遅かった。いつも以上に疾く駆けたにも関わらず、
青タイツの蹴りが再び衛宮を襲い、それを喰らった衛宮は土蔵へと

姿を消した。

「チッ、小僧の知り合いか？」

良かった。土倉を背に青タイツの前に滑り込んだので、
衛宮の姿は確認できないが生きている。ダメージは負っているだろうが、
致命傷と言うほどのものは無さそうだと気配で感じ取る。

「……」

「フンッ、まぁいい何者か知らねぇが死んでもらうぜ」

「随分とお喋りな暗殺者のようだ。口を動かす暇があれば、
先ずは得物を動かすべきだ。それとも貴様の得物は飾りか？」

久しぶりだ。一瞬でも気を抜けば命を刈られるような緊張感。
だが、それと同時にとてつもない高揚感。
自然と頬の筋肉が釣りあがっていく。

「小僧っっ！！　その物言い地獄で詫びろッッ！」

色々と考えるのは後回しだ。今は目の前の危機を乗り切るのが先決。

「…Ｏｕｖｒｅｚ」

生涯の相棒（とも）よ。今一時、再び共に参ろうぞ。

「なにっ！？」

ランサーは驚愕の表情を浮かべた。
放たれた高速の突きを弾いた目の前の男。
一撃で仕留めるられるハズだった。

そう、ハズだった…。なのだ。

実際に今も目の前の男は健在。そして握られたる武骨な剣。

ランサーは驚愕を止め、２度、３度、４度、と己が槍を振るい突く。

その繰り出す攻撃回数を増やしていく。

だがどうだ、目の前の男はそれをまた凌いで見せた。

さっきまでの雰囲気とはまるで別もの。

いや、最初の物言いのところから感じた僅かな違和感。
只の人間がサーヴァントの重圧を受けて、顔色一つ変えずに減らず口を叩けるのか？
今、それはさらに大きくなり、一つの疑問となる。

「…貴様、セイバーか」

「さてな。セイバーという物が軍刀を指すなら違うと答えよう」

男は若干、眉を顰めた後に答えた。
本当に知らないのか？　それとも挑発しているのか？

「……」

あまりに不可解なこの状況にランサーも迂闊に手を出すことを躊躇った。

その時、男の後ろの建物、先ほど蹴り飛ばした少年が突っ込んだ場所から光が零れた。

次の瞬間、目の前の男が吹き飛ばされた。

そして次はランサーの番だった。

咄嗟に槍を盾に防いだが、後ろに後退させられた。

「今度こそ本物か……。よぅ…」

突如現れた銀の鎧を纏った黄金色の髪の少女。そして自分を吹き飛ばした張本人。

武器は持っていないがどんなトリックだ？

と内心考えながらもライダーは不敵に少女に語りかけた。

ワタルです。

さっきまで戦闘していたら急に後ろから現れた何者か盛大に吹き飛ばされたとです。

僕が何をしたと言うんですか、全身が軋んでいるとです。

「くそっ、ブーストかかってなかったら完全に逝ってたな」

土蔵の方から突如として感じたプレッシャー。
飛び出してきた銀色が斬りつけてきたがギリギリ剣を体との間に滑り込ませ、
防御に成功したものの、一瞬だが闇に落ちた。

暗転した視界が戻れば自分が地面に這い蹲っている事に気付く。
立ち上がり周囲を見回せば、さっきの青タイツと凛々しい表情の少女が戦っている。

「何がどうなってんだ？」

考えるに、俺をゴルフボールよろしくフルスィングしてくれちゃったのは、
…あの女の子だろう。

情報が少ないのでどちらかに加勢するかどうかも悩む。
普通に考えれば今まで命の取り合いをしていた相手より
女の子の方に付くべきなのだろうが。

…俺をいきなり斬り飛ばしてくれた相手だ。

とても友好的だとは思えん。

俺が思考している間にも騎士風少女と青タイツは化け物染みた戦闘を繰り広げている。

「どうしたランサー、止まっていては槍兵の名が泣こう。

そちらが来ないのなら私が行くが」

「……は、わざわざ死にに来るか。それは構わんが一つ聞かせろ。貴様の宝具――――それは剣か？」

なるほど、少女の手には何か握られている。
それが武器と言うことは分かるが、……風を纏って不可視にしているのか？

「さあどうかな、戦斧かもしれぬし、槍剣かもしれぬ。いや、もしかしたら弓ということもあるかもしれぬぞ、ランサー？」

「はっ、ぬかせ剣使い」

ああ、やはり剣か。前の生涯を通して聖剣や魔剣を何度か見たことがあるが、
あれはそういった類のもの。そしてあの輝きからして前者。
きっと強力な呪符は持ち主に栄光や勝利を齎すのだろう。
だが、誤れば破滅も齎す。
その巨大な力ゆえに、どんな聖者だろうか力に溺れる事がある。
そして破滅。
俺は何度か手にする機会はあれど其れを持つことは生涯一度も無かった。
力に溺れることを恐れたのだ。

俺は自身が俗物である事を重々承知していたから、
それでも信じていた。
聖剣になど頼らずに己が往く道末を。
だが今は如何でもいいこと。
「ついでにもう一つ訊くがな。お互い初見だしよ、ここらで分けって気はないか？」
「……」
「悪い話じゃないねぇろう？　あそこで惚けているお前のマスターは使い物にならんし、
俺のマスターも姿を見せない腰ぬけときた。そして変な奴までいやがる。
ここはお互い、万全の状態になるまで勝負を持ち越した方が好ましいんだが――」
変なやつだ、と？　何処だ？！　あ、俺か。
失礼な発言ではあるが、そこは流そうじゃないか俺は空気読める男。
そして、青タイツの言っている事大いに賛成なのだが…。
あっ、衛宮だ。良かった大丈夫そうだな。
「断る。貴方はここで倒れろ、ランサー」
えっ！？　断るの？！

「そうかよ。ったく、こっちは元々様子見が目的だったんだぜ？
サーヴァントが出たとあっちゃ長居する気は無かったんだが――
――――――」

急激に空気が変わった。二人の周囲の空気いや青タイツの周囲が歪む。

そしてランサーと呼ばれた青タイツの姿勢が低くなる。

「宝具！」

騎士風少女は不可視の剣を構え直した。

「……じゃあな。その心臓、貰い受ける！」

青タイツからとんでもない魔力が噴出し、
俺に向けられた物でもないのに背中がゾクリと凍る。
手に持つ槍は彼女の足元めがけて繰り出される。

だが、解せない。

と思う同時に体が動き出してしまった。

「ｓｏｒｔｉｅ　ｊｕｓｑｕ'？」

疾いっ！　が、何故、足元を狙う必要がある？
あれでは避けて下さいといってるようなもの。
青タイツもといランサーの槍が赤く光り、

「”――――――――――――刺し穿つ（ゲイ）”」

案の定、騎士風少女は避けて上から切り伏せようとしている。
まにあえええええーーーー！！！
「”――――――死棘の槍（ボルク）！”」
下段より放たれた槍は、その起動は変え少女の心臓に向かっていた。
「チェストォォォォ――――――！！」

渾身の魔力を込めて放った航の斬撃波はランサーの放った槍先を捕らえ、
セイバーの本来であれば貫かれるはずの心臓の軌道を逸らす事に成功した。
もっとも彼女の直感でギリギリのところで其れを避けていたのだが、
二つが重なったことでセイバーの概念武装を少しばかり傷付ける事で、
事なきを得た。
ただ、セイバーはその衝撃ゆえに後方に大分飛ばされてしまったが。

「呪詛…、いや今のは因果の逆転か」
着地と同時に呟くセイバーに対して
「テメェ…ッ。邪魔したな我が必殺の刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）を」
かなりの怒りを孕ませた顔のライダー。
両者の中間に位置取り、剣を肩に担いだ男は不敵に笑う。
「いささか無粋な、青いの。女は愛でる者ぞ。
真心と情熱を込めて心射止めるというならば邪魔はせんが、
そのまま心臓貫こうとは、我が前では見過ごせんな。…セタンタ君？」

「チッ、まずったぜ。今日はここで退かせて貰う」
かなり怒気を秘めながらもランサーは踵を返す。
「逃げるのかランサー！」
セイバーは叫ぶが動けない。
「あいにくマスターの指示でな。　追ってくるなら、死ぬ覚悟で来い」
ランサーは去って行った。

だがセイバーは油断なく剣を構えた。
もう一人の剣を持った男に。
「どういう事情かは知りませんが、先ほどの礼は言います。
ですが敵であることは変りません」
不可視の剣を男に向けるセイバー
「ちょっと待ってくれセイバー。月見里は敵じゃないっ！！」
「なっ！　マスター危険です！　下がってください」
「だから平気だって！　月見里一体何なんだこれは！？」
セイバーを押しのけて出てきた士郎。
「…マス、ター…だと！？」
セイバーの放った士郎への言葉で月見里航は愕然とした。
「貴様っ！　ハーレムでも作るつもりか！！！！」

心から叫んだ。

「なんでさっ？！」

衛宮士郎は混乱した。

「

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2296z/

Fate/Je suis inconnu

2011年12月11日19時09分発行